

葬儀に関する迷信

葬儀の迷信

「清め塩」、塩で故人を清めるとは？

他宗においては、葬儀の際に、いわゆる「清め塩」を使います。これは、「死者は

けがれているから塩でそのけがれをはらう」ということからきています。

しかし浄土真宗では、人の死を、けがれたものとしていません。亡き父母や肉親の死がなんで、けがれているのでしょうか。死者は浄土へまいる仏となられたのです。「清め塩」は仏教と関係のない迷信的行為であります。浄土真宗の門徒にとって無縁のものだということです。

葬儀の迷信

枕飯を供えないのは？

他宗では人が亡くなると、故人の枕元に一膳飯を供える習わしがあります。

茶碗に御飯を山盛りにして箸を真ん中に立てます。

これは死の霊にご飯をささげること、と説明されていますが、浄土真宗では、枕飯は供えません。

浄土真宗は靈魂の存在を認めていませんから、このような行為はそぐわないのです。ただし浄土真宗においても、通夜、葬儀の際に「お仏飯」は仏飯器に盛って供えます。故人にではなく阿弥陀如来に供えるもの、とされています。亡き人に供えるものではありません。

葬儀の迷信

友引には根拠があるのですか

「友引」は「大安」や「先勝」……などの六曜という歴の言葉です。「友引」の日に葬儀を行うと友を引き、さらに人が死ぬか

ら葬儀を先延ばしにする、というような風潮がありますが、これも何の根拠もない迷信です。

六曜は日の吉凶を占う歴です。もともと浄土真宗では日の吉凶を否定しているのですか、こういうことにとらわれてはいけない、ということです。

ちなみに「友引」のもともとの意味は「共引」で、勝負ごとを占う意味のものでした。共に引き合って勝負なし、それが、「友引」の意味です。

葬儀の迷信

守り刀、死装束も必要ないとは？

他宗においては故人の棺の上に刀物を置く習わしがあります。これを

「守り刀」と呼ぶ、魔除けとか死者の霊を慰めるため、と説明しています。このような行為は浄土真宗の教えにはそぐわないものです。

また他宗では故人に、いわゆる「死装束」を着せるのが普通です。死装束は死出の旅に出る、という発想からきています。この装束を着けると地獄に落ちるものでも、極楽に行けると説明されています。

しかし浄土真宗では、このような装束は必要ありません。なぜならば、浄土真宗では死者が亡くなると、阿弥陀如来の働きによって、浄土に往生する、とされているからです。

「ご冥福をお祈りいたします」著名人が死亡すると、テレビのアナウンサーは、このようにいいます。

しかし、浄土真宗では、「冥福を祈る」とは言いません。「冥福」とは、冥土の幸福すなわち暗闇の世界（主として地獄（じごく）、餓鬼（がき）、畜生（ちくしょう）の三悪道などをさす）の幸福を祈るということになります。浄土真宗では、人は亡くなると、阿弥陀如来のお救いによって、極楽に生まれると教えています。したがって、人が亡くなった後、幸福を祈るということは甚だ失礼なことです。

ちなみに、浄土真宗では、これに変わる言葉として「哀悼の意を表します」という言葉があります。

Q浄土真宗では「御霊前」と呼ばないのは

浄土真宗では、葬儀や法事の歳金の袋を包む袋に「御霊前」と書いたものを用いません。

他宗においては四十九日までを「御霊前」、それから後を「御仏前」とするのが習わしです。それは、四十九日までは亡き人はまだ成仏していない、という考えからきているものです。しかし、浄土真宗には亡き人に霊魂が宿っているという考えはありません。念仏を申すことによって仏になると教えています。

したがって仏事や法事においても、袋の表書きは「御仏前」を用います。

Q 亡き人を浄土へ導いて下さるのは

「引導を渡す」という言葉があります。
本来の意味は人々を仏道に引き入れ導く

ことを意味します。現在では葬儀の際、導師である僧侶が死者を浄土へ導くための一種の教語として使われています。一般に「偈」を入れる儀式として知られていません。浄土真宗では、このような儀式・作法はありません。浄土真宗の教えでは、人々に導いてくださるのは阿弥陀如来なのです。導師が死者を浄土に導き入れるという考え方はありません。

Q 四十九日は三月にまたがってはいけない？

「三月越しの四十九日」というのは、四十九日法要を命日

から三ヶ月目になって行なうことを指します。しかしこれを禁じる掟など、どこにもありません。カレンダーをにらんで、月のうちどの日なら三月越しになるのか数えてみて下さい。たとえば十月十四日に亡くなったのなら、四十九日は十二月一日で三月越しになります。ということは毎月十四日以降の命日のときはすべて三月越しの四十九日です。三月越しになることの方が多いのです。それをだめだといっていたら、「四十九日」の意味もなくなってしまいます。

三月越しの四十九日を嫌う風潮は「始終苦（四十九）が身につく（三月）」という語呂合わせが起源のようです。ばかばかしいと思いませんか。なんだか、仏事を早くすませたいから言い訳しているようにみえてなりません。それは言い過ぎかもしれないませんが、仏事を行なうのに縁起を担いだり日柄を気にしたりする必要はまったくありません。というより、そのようなことを考えることこそ、仏事のところに背くことです。

四十九日とは故人の命日を基準として七日ごとに行う「中陰法要」の最後の法要で、「満中陰（まんちゅういん）」ともいいます。最初の七日目を初七日（しょなのか）、次いで二七日（ふたなのか）・三七日（みなのか）と続き、七七日が満中陰です。もともとはインドの輪廻思想の中で、前の生涯から次の生涯に生まれるまでの宙ぶらりんの期間を「中陰（ちゅういん）」もしくは「中有（ちゅうう）」といっていました。49日目にはれて次の生が決定するから四十九日を特に満中陰といえます。それが仏教の風習に入り込んだのが、今の中陰法要です。

しかしそれがそのまま仏教的に意味のあることではありません。生死輪廻を超えていくことを目的とするのが仏教であるからです。特に浄土真宗では、生前から念

仏に出会い、疑いなく信心をいただいた者は、臨終の次の瞬間には浄土へ往生すると教えられています。死者の霊魂が、49日もの間この世をさまよっているというようなことはありません。

この49日間という時間は、むしろ後に残った遺族の心が整理されてくる期間と、味わうことができます。別れの悲しみが癒され、本当に落ち着いて故人の死と向き合えるようになるまでの期間です。ふらふらと迷っていたのは、亡き人ではなく実は、死を嘆き恐怖する私の心であったのです。浄土へ往生された方は、そのまま私を導く如来のはたらきとなっておられます。常に私に願いをかけ続けておられる。その願いにより私の迷いが知らされる。その願いを落ち着いて聞きとどめることができるのが、四十九日の機縁です。

仏事は、私が故人に「何かをしてあげる」のではなく、むしろ仏となられた故人の「願いを聞かせていただく」ものです。亡き人のために何かせねばという姿勢は、かえって故人の往生を疑っている、つまり仏の願いを疑っている姿にほかなりません。「願いを聞かせていただく」貴重な時間を、単なる語呂合わせで日程を変更したり、気を揉んだりしては、せっかくの法縁が台無しになります。故人をゆっくりと偲び、またその思い出を、今度は仏の願いとして味わっていく機縁が四十九日法要なのです。

日程のやり繰りが難しいなら、妙な言い訳は不要です。皆が落ち着いて聴聞できる日を選べば、それでいいのです。